DOI: 10.57461/nujlp.301.1

論　説

グローバル・ヒストリーから見た李用熙の韓国ナショナリズム研究

姜　東局

1. はじめに

グローバル・ヒストリー分野の急速な興隆は、多くの既存研究に疑問を投げかけている。新たな研究対象を浮き彫りにするだけでなく、既存の成果に対する新たな理解の必要性を迫ることもある。この潮流が韓国を対象とする研究に持つ意味の重大さについては、『焼酎の世界史（Soju: A Global History）』の一読で十分だろう[1)]。今日も君臨している韓国の「伝統的な」酒文化を理解するためには、グローバル・ヒストリーの観点が不可欠であることを実証的に示しているからである。また、学問分野の観点からすると、グローバル・ヒストリーは、政治学の分野において特別に重大な意味を持つ。国内政治学と国際関係論の並立自体が国家と国際体制の分離という近代の政治像を前提としているため、この区別を相対化するグローバル・ヒストリーのアプローチは、潜在的に既存研究全般に対する問題提起につながりかねないからである。本研究は韓国政治、その中でも、韓国ナショナリズムを対象とするが、以上の考察からグローバル・ヒストリーがこのテーマにもたらすインパクトの大きさは想像できるであろう。本研究は、グローバル・ヒストリーの観点から韓国ナショナリズムを見直す作業を通じて、韓国を対象とする政治学研究に対して投げかけ始めた一つの問い、あるいは挑戦に対する回答の性格を持つ。

ところが、この研究はグローバル・ヒストリーの展開という世界的な流行の受動的な反応にとどまらない。すなわち、韓国政治学の知的な流れを批判的に継承する作業を通じて当代のグローバルな課題に答えることで、

1）　Hyunhee Park, *Soju: A Global History*, Cambridge University Press, 2021.

外部への対応とともに内部からの発信を同時に展開することをも目指す。20 世紀の韓国の学問は、他の諸分野と同じく西洋近代というモデルに追いつくための努力にまい進した。近代政治を超える将来を構想する際にも、このような態度がそのまま持続すれば、西洋という他者によって疎外されることのない学問の展望は、今後も悲観的にならざるを得ないだろう。ところが、韓国ナショナリズムという対象に関しては、20 世紀の先駆的な成果が韓国の立場でグローバル・ヒストリー的観点の議論を展開するための出発点を提供している。本研究ではその代表的事例として国際政治学者・李用熙（1917-1997）の議論に注目する[2)]。彼のナショナリズム論が 20 世紀の韓国ナショナリズム論の展開で主流だったとは言えない。韓国ナショナリズムの創成期から歴史学が議論を主導したが、そのような状況は 20 世紀後半においても変わらなかった。したがって、李用熙に代表される国際政治学におけるナショナリズム論は傍流に過ぎなかった。ところが、当時の現実の影響力と今日における学問的な意義は別問題である。国民国家の枠組みにとらわれていた多くの歴史学のナショナリズム論とは対照的に、李用熙のナショナリズム論は国際政治の構造変化と関連して韓国ナショナリズムの変遷をたどったという特徴を持つ。グローバル・ヒストリーの観点から韓国ナショナリズムを把握しようとする本研究の問題意識から見れば、彼のナショナリズム論が、世界とのつながりという面、そして、ナショナリズムの変遷を見るという面から、グローバル・ヒストリーとの親和性を持つことが目立つ。

本研究は韓国ナショナリズムの研究に対して、「グローバル化と開放を当然視しながらナショナリズムを時代錯誤的だと批判したり、韓国ナショナリズムが［開かれたナショナリズム］にならなければならないという議論は盛んだ」が、「ナショナリズムの代案が何であり、開かれたナショナリズムが具体的に何を意味するのかについての議論は見当たらない」という批判が依然として有効だという判断の上に立っている[3)]。東アジア地域とのつながりを通じてナショナリズムの新たな展望を提示する潜在性を示

2）　李用熙の人生と学問に関する紹介としては、河英善『歴史 속의 젊은 그들』（乙酉文化社、2011 年）「第 7 講：東洲李用熙와 韓国国際政治学」を参照。
3）　金永明「韓国民族主義의 争点：概念과 課題」韓国政治外交史論叢 vol.38 no.1 218 頁（2014 年）。

した東アジア言説は依然として可能性にとどまる感があり[4]、グローバル・ヒストリー的文脈で韓国ナショナリズムを議論する先駆的研究は、欧米や日本などとのナラティブ側面での類似性に焦点を合わせた結果、韓国ナショナリズムの意義の継承を考慮せず、性急な廃棄の展望を論じるなど[5]、上記の批判を克服したといえる成果がいまだに乏しいからである。本稿は、李用熙に代表される韓国の国際政治学界が20世紀に残したナショナリズム論の成果と限界を明らかにし、グローバル・ヒストリーの観点を導入することで、今日における批判的な継承の道とその作業による韓国ナショナリズムの昇華と克服の展望を示すことで、昨今の韓国ナショナリズム研究の突破口を提示することを目的とする。

2. 李用熙のナショナリズム研究の性格

1）方法：国際政治とナショナリズムの関連

李用熙は正規課程を通じて育てられた研究者ではなかった。延喜専門学校文学部卒業を最終学歴としていた彼が国際政治学の分野に定着したことは、制度に縛られない、あるいは制度から疎外された自由な知的探求の終着を意味した[6]。このような独特な経歴を反映した個性的な学問の展開は、ナショナリズムをめぐる議論でも明確に表れているが、その最も重要な特徴は国際政治との密接な関係性の中でナショナリズムを把握することであった。1956年に出版された『国際政治原論』でこの関係性の原風景が確認できる。

> 本来、私が抱くようになった政治学への関心は、我が民族がなぜこのように脆弱なのかという疑問を放って置いては考えられないことであった。私の政治学は、私が住んでいる地域、また私がその中に住ん

4） 白永瑞『東亜細亜談論의 系譜와 未来：代案体制의 길』（나남出版社、2022年）。
5） 林志弦著・澤田克己訳『犠牲者意識ナショナリズム：国境を超える「記憶」の戦争』（東洋経済新報社、2022年）。
6） 玉昌埈「李用熙의 知識体系形成과 韓国国際政治学의 再構成」사이 22号 89-131頁（2017年）；姜東局「国際政治学者 李用熙의 誕生」서울大学校国際問題研究所編『韓国国際政治学、未来百年의 設計』（社会評論아카데미、2018年）15－62頁。

でいる国の運命と無関係ではなかった。ところが、私はなぜ私たちの同胞がこのように脆弱なのかという問題を考察するうちに、脆弱なのはただ私たちだけでなく、ヨーロッパの政治や経済をいち早く模倣した日本を除いて、東洋全体がそうなっていることを改めて感じるようになった[7)]。

李用熙は民族の脆弱性に対する切実な疑問を解く過程で、自分の学問的視野が世界に向かうことになったと告白している。国際政治学の分野における初の著書であるがゆえに本格的な研究の出発点と見なせる研究で、李用熙は自己において国際政治という学問分野はナショナリズムの信念の帰結であったことを明確にしたのである。このような国際政治とナショナリズムの関係性は、続く一連の研究を通じて学問的に整えられてきた。上記の著書から10年後の1966年に李用熙は国際政治学会長として、韓国ナショナリズムをテーマとするシンポジウムを開催した。その場で彼は以下のように講演した。

ここでナショナリズムとは、政治的な意味で扱われる。また、同時に政治的な性格がナショナリズムの核心だと私は理解する。ナショナリズムとは西欧史において近代後期、すなわちフランス大革命以後に明確に現れた、いわゆる近代国家 nation-state 類型に対応する政治的原理と解釈される。いや、単なる原理にとどまらず、近代国家的活動に内在的に作用する動力としても理解できる。……近代国家は国家間の関係の総和として、また近代国家がある場として「近代国際政治秩序」を前提とする。そして、この「国際政治体制」は近代国家の性格の外にあるのではなく、互いに媒介されることで一体を成すと解釈される。……このような近代国際政治の基本類型に対応するイデオロギーがナショナリズムであることは、周知のとおりである[8)]。

李用熙はナショナリズムが近代国家類型の原理であり近代国家的活動の動力であることを学問の言葉を用いて指摘した。極めて常識的に見えるこ

7）　李用熙『東洲李用熙全集　第1巻』（연암서가、2017年）4頁。
8）　李用熙『東洲李用熙全集　第2巻』（연암서가、2017年）247-249頁。

の主張の持つ重大な含意を理解するためには、彼が近代国家を主な行為者とする近代国家体制に対して独特の理解を持っていたという点に注意する必要がある。この講演の 4 年前に李用熙は「行動主義アプローチ」の虚構性を暴露する著書である『一般国際政治学（上)』を上梓した[9]。本書で李は国際政治圏域を主な分析単位として設定し、その間の伝播などの一般的な理論を説明するとともに、特定の国際政治圏の特徴を持つ当時の国際政治を説明するために近代国家の起源と変化を追跡する歴史社会学的考察を展開した[10]。本書によると、近代国家や近代国際体制は西洋で歴史的に生成され、他の地域に伝播された歴史的実体であった。したがって、李用熙が見るところ、現在は支配的なこのモデルも今後の歴史の中で変容されることは必然である。このような脈絡で近代国家とナショナリズムの関係性を理解すれば、将来は近代国家という現実に変化が発生し、これによってナショナリズムという近代国家の理念にも相応する変化が発生することが自然に想定される。先に議論したように、個人として李用熙は同胞に対する愛情と憐憫を持っているという側面でナショナリストであったが、学者として李用熙は、ナショナリズムが歴史的に生成された構成物だという事実を冷徹に認識していた。20 世紀中盤の韓国において、ナショナリズム以後を展望するという点で、李用熙は非同時代性を持った少数派だった[11]。その結果、彼はほとんどの同時代の論者とは区別される複眼的な視点で、韓国ナショナリズムの変化に対する独特な学問的展望を残すことになる。

さらに、国際政治とナショナリズムの関連は普遍を巡る主体の認識態度に差をもたらしたという点も、李用熙の韓国ナショナリズム論において重要な意味を持つ。20 世紀後半の韓国でナショナリズムを普遍として受け入れる状況は、近代西洋の歴史的経験を特権化、ひいては絶対化する知的姿勢によって裏付けられていた。李用熙は同じ講演でこの問題について以下のような議論を展開した。

9） 金容九『金容九研究回顧録：韓国国際政治学発展을 為한 60 年의 思索』（연암서가、2021 年）15-17 頁。
10） 閔丙元他『場所의 意味：東洲李用熙의 学問과 思想』（연암서가、2017 年）88-117 頁。
11） 張寅性他『李用熙의 政治学과 政治思想』（연암서가、2023 年）134-171 頁。

> 日帝下の知識人の中にはヨーロッパ文明の摂取という原理の下、文化科学全般にわたってヨーロッパの啓蒙期以来の普遍主義、そして思想のコスモポリタニズムを受け入れた。したがって、それは今日の大韓民国の一部文化界においては、ほとんど思考と文化の姿勢になった感じがある。これは結局、外国勢力の支配の現実を知ろうとしない一種の逃避主義にすぎない。この点において、ドイツの古典文学期の普遍主義、世界主義が結果においてどれほどドイツ民族の統一意識を遅くし、またそれによってついにドイツの後進性が 19 世紀後半まで克服されなかったという歴史的事実を想起する必要がある[12)]。

李用熙によると、近代国際政治圏は西洋という特定地域の国際政治の特徴が他の世界に伝播された歴史の産物であった。したがって、空間的には圏域の地域的特殊性が、時間的には圏域の歴史的可変性が存在した。ところが、朝鮮半島に住んでいた植民地時代の知識人、そして当代の文化界の一部では西洋を世界の普遍として受け入れる動きがあった。李用熙はこの動きに外国勢力の支配という現実を糊塗するイデオロギー的機能があることを暴露した。このような批判が志向する姿勢は、ドイツの例を反面教師にして逃避主義から脱した積極的姿勢で、韓国の立場でナショナリズムという議題を扱うのであった。

以上の議論を通じて、李用熙は国際政治とナショナリズムを結び付けて理解するという学問的前提を持って方法論を構想した結果、内容の面では国際政治の変化によるナショナリズムの変容の歴史的展望を追求し、観点の面では西洋近代を普遍と見る姿勢から脱し、主体的にナショナリズムの問題に接近するという方法論的特徴を持つようになったことが分かる。

2）内容：韓国ナショナリズムの実現と克服

李用熙は前節で考察した方法を利用して韓国ナショナリズムを研究したが、彼の方法論が持つ独特な性格の結果、その成果の多くは当時の韓国で主流となっていたナショナリズム論で考えられなかったものであった。

12）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）263 頁。

1971 年の対談で 3·1 運動の意味について触れた際にも、このような特徴は明確に表れている。

> 3·1 運動についてはいろいろな評価がありますが、私個人としてはなぜ議論されないのか疑問に思う点があります。3·1 運動はナショナリズム運動と関連があるのですが、決定的な意味は何かというと、3·1 運動になって初めて韓国の政治史的な独立意識が世界史的な意識の潮流と結びついたことです。……3·1 運動からは少なくとも意識形態においてはウィルソンとか世界大戦とか言うようになり、さらにソ連共産主義革命とかいう世界的な展開でナショナリズムを立てました。3·1 運動が真の意味で重要なのは、朝鮮半島の意識形態において意識的に自分の歴史性を世界史に結び付けたというものすごい事実だが、この点はあまり強調されていないような印象を受けます[13]。

李用熙は、国際政治的な文脈の中で韓国ナショナリズムを見ていたため、韓国ナショナリズムが世界の流れと意識的に結びつく出発点というテーマを議題化することができた。彼によると、3·1 運動期に韓国人は、自分たちのナショナリズムをウィルソン主義や共産主義革命という世界的展開と意識的に結びつけ始めた。李用熙が疑問を持ったように、このような論点は当時韓国学界でほとんど議論されていなかった。エレス・マネラ（Erez Manela）がウィルソン主義のグローバルな展開を研究しながら提示した 3·1 運動と世界の変化との関連性という命題を、李用熙が 30 年以上前に提示していたという点は記憶する必要があるだろう[14]。

このように李用熙の韓国ナショナリズム研究は、国際政治と韓国ナショナリズムを関連させるという方法論の大前提だけでも先駆的な成果を提示したが、先に触れたより具体的な二つの方法を適用することで、さらなる内容を生産するに至った。

第一に、国際政治の変化によるナショナリズムの変容に注目する方法か

13）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）479-480 頁。
14）Erez Manela, *The Wilsonian Moment: Self-Determination and the International Origins of Anticolonial Nationalism*, Oxford University Press, 2009 の Chapter 7 The 1919 Revolution を参照。

ら、韓国ナショナリズムの過去と現在、そして未来に対する説明が行われた。上記の韓国国際政治学会開催シンポジウムで、李用熙は韓国ナショナリズムをテーマにした理由を説明し、以下のような議論を展開した。

> 近代国家は抵抗だけでできるものではなく、抵抗から始まるわけでもありません。抵抗ナショナリズムは近代国家以前の現象であり、独特のナショナリズムの形です。歴史における新しい近代国家的な発展、あるいはそれに伴うナショナリズムの発展は、その前段階の抵抗から前に進む建設的で前進的なものです。外国勢力への抵抗だけでなく、その外国勢力への抵抗から、その次には自らの力を育て、自らの民族の発展を図る、すなわち近代国家としての現代的な体制を自己充足的に、内部で発展させ、また外部的な条件を作る、そういった前進的な能力が、近代国家を形成するナショナリズムの魂であり、精神だと思います。そのような意味で、過去の韓国の抵抗は、もちろん栄光に満ちた名誉の歴史ではありますが、しかしそれだけでは未完の場であり、未決の過程ではないでしょうか[15]。

李用熙は韓国ナショナリズムの歴史的特質を帝国主義との闘いによって形成された抵抗ナショナリズムとして提示した。これは時系列的には近代国家以前に位置する独特なナショナリズムであった。近代国家の発展に寄与するナショナリズムは、抵抗のナショナリズムの次のもの、すなわち前進的ナショナリズムでなければならないと説明している。彼は抵抗ナショナリズムが緊急な抵抗の必要性のためにナショナリズムに反する要素までも含む現象を批判し、韓国ナショナリズムが近代化と民主化などの内容を満たす必要性を繰り返し主張した。以上のように、李用熙が国際政治の変化によるナショナリズムの変容の方法によって、韓国ナショナリズムを歴史化し、また評価したことが分かる。

第二に、西洋近代を普遍と見る姿勢から脱し、主体的にナショナリズムの問題に接近するという方法論的特徴は、韓国ナショナリズムを様々な国際政治的文脈で理解する可能性を提供した。例えば、李用熙は1965年の「韓

15）李用熙『東洲李用熙全集　第2巻』（연암서가、2017年）239頁。

国の近代化とナショナリズム」というタイトルの対談で韓国ナショナリズムの一側面について、以下のように話した。

> 自主性の問題は私たちも直面していることです。政府当局者が何度も自主性を強調していることですが、その意義自体が何らかの風潮を物語っているようです。私たちはアジア・アフリカの中で、このテーマに関しては先頭に立っているのではなく、中間程度で問題を提起していると言えます[16]。

対談のタイトルからわかる通り、李用熙は韓国のナショナリズムを近代化というもう一つの至上命題と結び付けて議論した。ところが、彼の考察は近代化のモデルである西洋だけを比較対象にしなかったという面で、当時の一般的な近代化論のアプローチと区別された。韓国が脱植民地国家という明白な事実を、ナショナリズムの核心となる自主性に対する理解に適用した結果、韓国と歴史的経験を共有するアジア・アフリカ諸国の現象を主要な比較対象にしたのである。そして、比較の結果は、韓国ナショナリズムは自主性の課題ではアジア・アフリカ諸国をリードしていないという冷静な評価であった。韓国が冷戦の最前線に置かれた結果、依然として米軍が駐留するなど自主性が損なわれていた点や、1955 年のアジア・アフリカ会議や 1961 年の第 1 次非同盟会議など、自主性を追求するアジア・アフリカの世界的な流れに合流できていなかった当時の状況を考慮すれば、このような評価は穏当といえるだろう[17]。西洋近代をモデルとする近代化と関連してナショナリズムを議論する状況でも、李用熙は韓国と第 3 世界をつなぐ議論を通じて、ヨーロッパ中心主義から脱却し、本当の意味のグローバルなコンテキストからに韓国ナショナリズム論を展開したのである。

ところが、李用熙は国際政治とナショナリズムをめぐる 2 つの方法を当時の現実の理解に使うことにとどまらなかった。彼は議論の時間軸を将来

16）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）432-433 頁。
17）アジア・アフリカの台頭に対する韓国社会科学界の反応とその帰結に関しては洪定完『韓国社会科学의　起源:이데올로기와 近代化의　理論体系』（歴史批評社、2021 年）を参照。

へ延長させ、国際政治の変化に伴う韓国ナショナリズムの展望を提示するに至った。同じ対談で、李用熙は当時の国際政治を以下のように理解していた。

> 国際政治の傾向はすでにリージョナリズム（地域政治）に流れており、この傾向はナショナリズムの方向性と一致しています。……国際政治や世界史の潮流に照らしてみると、韓国は歴史の後輪に従っています。国際的にはナショナリズムを克服してインターナショナルに向かっていますが、韓国もナショナリズムを克服して前輪に沿っていかなければならないということです[18]。

李用熙は1965年の国際政治の最先端の傾向を地域主義（regionalism）の展開と理解していた。実際、この年、欧州では既存の欧州原子力共同体（EURATOM）、欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）、欧州経済共同体（EC）を一つにまとめる提案が出され、この合併条約がブリュッセルで締結された。そして、1967年7月に欧州共同体が設立されたことを考慮すれば、彼の評価は理解できるだろう。李用熙はこのような国際政治の転換が当時のナショナリズムの変化、すなわち最先端のナショナリズムがインターナショナルの方に動くこととも一致していると理解した。国際政治とナショナリズムの関連を前提とする方法を通じて、李用熙は地域主義という新しい国際政治の傾向が以前の国民国家のナショナリズムに変容をもたらしていることを直視した。さらに、韓国の主体的な立場でこの変化を理解した結果、韓国ナショナリズムは前輪という比喩で表現された先端の変化には遅れをとり、歴史の後輪に沿っているという評価を下しただけでなく、前輪に沿っていかなければならないという展望を提示するに至った。国際政治の変動に注意しながら、主体的に自国のナショナリズムの課題に取り組んだ結果、李用熙は1960年代中盤に当時の韓国においては例外的に、韓国ナショナリズムの克服の展望を提示するに至った。

18）李用熙『東洲李用熙全集　第2巻』（연암서가、2017年）441-443頁。

3）挫折：韓国ナショナリズムをめぐる現実の壁

前節で考察したように、李用熙は韓国ナショナリズムを抵抗的なものから前進的なものに発展させなければならず、さらには究極的にインターナショナルへ移す必要があるという展望を持っていたが、彼の展望の実現は、主観的熱望と客観的現実との距離という変数に左右されることになる。李用熙が生きていた時代の現実に照らしてみると、韓国ナショナリズムの前進や克服はどれほど現実的、あるいは非現実的なものだっただろうか。

李用熙は、1966 年にナショナリズムをめぐる当時の西欧と新生独立国の状況を以下のようにまとめた。

> アジア・アフリカの場合においては、このような歴史的傾向に、歴史を短縮して最先端に追いついていこうとする激しい欲求が加わる。要するに、昔も今も近代国家の手本を選ぶ以上、ナショナリズムの自己貫徹の過程が展開される。この点においては、近代化の過程が未完の状態の共産国家も例外ではない。……一方、近代国家の完成の状態に入った西欧諸国が、むしろ超国家的な欧州連合に熱意を示すのは、良い対照に違いない。また、過去にナショナリズムで先手を打った国家や今日の大国が新生国のナショナリズムの生長を往々にして国際平和への脅威と見ようとする傾向は、一種のアイロニーに違いない。……19 世紀前半に、メッテルニヒの反動政策によって、ナショナリズムは二進一退、紆余曲折を経て直線的とは到底言えなかった。それでも、歴史の流れの中でこの問題は自然に解決された。この点でも過去 20 年間のアジア・アフリカの歴史は 19 世紀の古典的な例に似ていく[19]。

李用熙によると 1960 年代半ばに、ナショナリズムは世界各地で目まぐるしい展開を見せていた。西欧が地域主義を実現するための情熱を見せている一方、アジアとアフリカの新生国はそろってナショナリズムを追求していた。すでにナショナリズムの時代を通過した西洋には、一方で自分たちの過去をモデルとする新生ナショナリズムを平和への脅威と見るアイロ

19）李用熙『東洲李用熙全集　第 4 巻』（연암서가、2017 年）464-466 頁。

ニーまで現れていた。彼は19世紀のヨーロッパでもそうだったように、当時の世界でナショナリズムは様々な紆余曲折を経て展開されるだろうと予測した。究極的には明るい展望を予測したが、その過程が順調に進むとは、必ずしも期待できない。李用熙は、韓国ナショナリズムについても、その前進が容易ではない課題だと見做していたように思われる。

ところが、韓国ナショナリズムをめぐる苦悩をもたらす要因は外部のものだけではなかった。 同時期に李用熙は、韓国の特殊な状況がナショナリズムの展望をさらに暗くしていると判断したようである。1965年末の対談で李用熙は以下のように述べた。

> 近代化、近代化と言っていますが、現実的に距離感がありすぎます。世界各国が物質的な繁栄を遂げているからといって、近代化に対して物質的なものに重点を置く傾向が多いのですが、いくらついていっても世界順位で見ては良くなりません。結局ついていけないというあきらめと絶望が伴うものです。……ナショナリズムは、ある意味で少なくとも不満を克服するという点で劣等感と絶望感を助長してしまいます。いずれにせよ、これだけは乗り越えなければなりません[20]。

李用熙は、韓国ナショナリズムと近代化に遅れをとった韓国の現実との間に存在する格差に注目する。当時、すなわち1965年の韓国1人当たりGDPは108ドルだったが、これはトーゴやパキスタンよりも低いものだった。脱植民地国家の中でも韓国人の経済生活が貧窮しているという統計は、韓国が近代化とは程遠い貧国という明確な指標だった。このような客観的状況から見て、韓国ナショナリズムが提示する自国に対する称賛は、むしろあきらめと絶望を伴っていたのである。

以上のように1960年代に李用熙は韓国ナショナリズムの苦境について議論をしたが、この明るくない展望は後にも続いた。彼は1973年に当時の国際政治の現状と韓国の近代化の状況の両方を考慮しながら、韓国ナショナリズムが直面している困難を以下のように分析した。

20）李用熙『東洲李用熙全集　第2巻』（연암서가、2017年）438-439頁。

現在、韓国ナショナリズムは非常に孤独な立場にある。それは抵抗ナショナリズムの長い伝統の下で生長したが、それを取り巻く歴史的かつ客観的な現実はいまだにナショナリズムの成熟からは程遠く、また今日に展開される新たな国際方面のナショナリズム、あるいは地域主義とも現実的につながりにくくなっている。……それ〔韓国ナショナリズム：引用者〕は翼を失った単一ナショナリズムであるだけでなく、東南アジアやアフリカ、中南米のような多民族主義や地域主義に進む周辺地域の条件も良くない。また、第3世界の国際的連帯の中核グループであるには、経済的条件があまりにも異なる。工業国対農産国という経済的意味を含んでいる南北関係に朝鮮半島が割り込む場所はそれほど広くない。左右の状況は島国らしい日本の閉鎖的単一ナショナリズムがある一方で、中国本土は公式には多民族国家であるが、韓民族にはほぼ単一ナショナリズム的な歴史関係に立っている。ソ連も韓国ナショナリズムとは無縁の国であり、いったいこの周辺の三ヶ国は政治・経済の現在の勢力または潜在力において強大勢力として、歴史から見て韓国ナショナリズムの役に立つ民族ではなかった。実に孤独なナショナリズムである[21)]。

李用熙は、韓国ナショナリズムが持つ抵抗ナショナリズムとしての内的限界を指摘した後、それが置かれた国際的なコンテキストについて説明した。ところが、ナショナリズムの国際的な連帯という基準から見て、韓国ナショナリズムの現状と将来は決して楽観的なものではなかった。先に指摘したように、彼は60年代にすでに地域主義と国際主義というナショナリズムの世界的変化を認識していたが、70年代に入っても韓国ナショナリズムはこのような変化を実現することは容易ではない状況に置かれているという診断であった。例えば、韓国はアジア・アフリカ、さらに中南米の諸国家と比較してナショナリズムを展開し、多民族主義や地域主義へと進むのに不利な環境に置かれていた。だからといって、第3世界の連帯や南北問題などを通じて世界につながるためには、当時の韓国は経済力など十分な資質を備えていなかった。また、日本、中国、ソ連のような周辺国

21）李用熙『東洲李用熙全集　第2巻』（연암서가、2017年）371-373頁。

は一様にナショナリズムの協力国になりにくい国家であった。結局、李用熙は当時、韓国ナショナリズムはグローバルな潮流の基準で評価した時、いかなる方向の進展も期待しにくい環境に置かれていると理解したが、彼はこのような状態を表現するために「孤独」という単語を選択した。

要するに、「孤独」という結論は、国際政治とナショナリズムを結び付けて理解しながら、韓国ナショナリズムをアジア・アフリカなどの国家と比較するという彼の方法を丁寧に使った考察によって到達したものであった。したがって、自分の学問が導いたこの虚しい結論、おそらく運命のように感じられたこの孤独なナショナリズムという現実を変える道が見えない状況で、韓国が追求できる意味ある実践の展望は極めて制限的なものにならざるを得なかった。上記の引用文に続く文章は次の通りである。

> たった一つの残った道が民族統一であり、その上に立って自分の本来の位置と機能を探さなければならないということは、ほとんど韓民族の本能的な予知であり情感である。幸いに、今日のナショナリズム対共産主義という冷戦方式の図式から次第に抜け出し、朝鮮半島においてはナショナリズムがすなわち単一国家の実質的形成において上位の政治概念として認められている。これをカステリオ（Castellion）方式というべきか[22)]。

李用熙は韓国ナショナリズムをめぐる実践の唯一の道として民族統一を提示した。この文章を書く直前の1972年に7·4南北共同声明が発表されが、彼はそれを契機に、ナショナリズムが冷戦的対立を越える上位の政治概念として認められるようになった点に注目した。彼は、当時の朝鮮半島では、南北が冷戦的思考を相対化し、ナショナリズムをより根本的な原理として認める過程にあるという判断をくだしたのである。韓国の場合は、ナショナリズム対共産主義という対立構図、すなわち共産主義は民族の敵だという冷戦的思考から脱し、ナショナリズムが自由主義と共産主義という二つの理念を下位に置いた上位の政治概念に変化しているという解釈だろう。李用熙はこの文章の発表から2年後の1975年に大統領政治担当特別補佐

22）李用熙『東洲李用熙全集　第2巻』（연암서가、2017年）373頁。

官となり学界を離れたが、その翌年から始まって公職が終わる 1979 年まで務めた職責が第 6 代国土統一院長官だったということは、彼の韓国ナショナリズムを巡る唯一の実践の展望と一致する。彼が長官職を遂行しながら新生の小さな組織だった国土統一院から中央情報部の影響力を排除し、国民の学術機関としての地位を確立させたのは、官僚李用熙の少なからぬ成果だった[23)]。しかし、韓国ナショナリズムというより大きな脈絡から見れば、これは国際政治学者・李用熙が韓国ナショナリズムの地域的、そして世界的な次元での前進という核心的課題を放棄し、実践の次元を朝鮮半島に狭め、やっと手に入れた成果という意味で、決して満足できるものではなかった。厳しい現実の前で、自分が究極的に追求した前輪への前進のための実践をまともに始めることすらできなかったという点で、韓国ナショナリズムをめぐる彼の努力は挫折したと評価するのが妥当だろう。

3. 李用熙のナショナリズム研究が残した課題

李用熙は 1980 年代以降も丁若鏞（1762-1836）に対する本格的な研究の必要性を提唱するなど、学問に対する関心を続けた。この時期を経て、彼の国際政治に対する理解がどのように展開されたかの一端を 1993 年春学期にソウル大学校大学院外交学科で行った特別講義で見ることができる。講義内容をまとめて『未来의 世界政治（未来の世界政治）』という本に編みながら、李は講義の前提となった当時の国際政治に対する理解を以下のように整理している。

> 本来この講義は、ヨーロッパで成り立っている国家連合が将来は政治の新しいモデルとなり、今日の国民国家に取って代わるという私の考えを吐露したことがきっかけとなった。それだけでなく、国民国家は一方で国家連合に拡大し、もう一方では地域政治体に細分化される傾向も見られる。いわば近代国家、国民国家は内部分裂を起こし、新しい政治形態を作る兆しが見えるというのが私の考えであった。これまでの国際政治は数百年間、近代国家体制の表現といえる面があるが、

23）張寅性他『李用熙의 政治学과 政治思想』（연암서가、2023 年）289-338 頁。

新しい国家形態の可能性とともに長い過渡期を経て、近代国家の性格の変化に伴う新しい形態の国際政治が展開されるものとみられる[24]。

先に見た通り、李用熙は1960-70年代にすでに近代国家の変化と、それに伴う近代国際秩序の変化を展望しており、彼が予想した方向に実際に動く歴史に対して持続的な関心を維持したものと見られる。実際、李用熙は本書の刊行に合わせて行われたインタビューで内容を説明し、「近代民族国家が車輪の後輪なら、国家連合は車輪の前輪に当たるわけです」と述べたが、数十年の歳月を超えた同じ比喩の使用からも、彼の思考の連続性が見える[25]。1960-70年代に李用熙が主導した国際政治とナショナリズムをめぐる一連の学術行事が同世代の研究者と交流する場という性格の強いものだったとすれば、この講演は彼が前世代の研究者として次世代に自分の研究を伝える場という性格が強かったと言える。

ところが、グローバル・ヒストリー的観点から韓国ナショナリズムを再構成しようとする本稿の主題から見れば、この講演の内容は十分なものからは程遠かった。第一に、国際政治の変化の説明で、ヨーロッパに現れた近代国家の弱体化に集中した結果、国際政治全般の説明では不十分さが目立つ。この講演で李用熙は『一般国際政治学(上)』の方法を使ってヨーロッパの近代国家の分裂現象を説明した結果、国家より下部のエスニック・グループ、そして何より国家より上部の地域共同体を集中的に扱うことになった。これらの対象はもちろん、当時の国際政治の変化の重要な部分を占めていた。ただ、李用熙が見逃している部分も小さくないことも事実であった。すなわち、地域面ではヨーロッパ以外のほとんどの地域が考察の対象から除外され、また、行為者の面では近代国家から派生していない国際政治の領域が疎外された。例えば、アジアの浮上など国際政治の地域的再編や多国籍企業など非政治的行為者の台頭という側面、そして、何よりも地域を越えて世界が一つになる側面はほとんど議論されていなかった。

このような狭さの問題は時間的制約などによって他の重要な対象がやむを得ず除外された結果という側面もあるが、李用熙自身がヨーロッパの地域主義展開以外の国際政治の変化の重要性を相対的に低く評価したがゆえ

24）李用熙『東洲李用熙全集　第5巻』（연암서가、2017年）4頁。
25）李用熙『東洲李用熙全集　第6巻』（연암서가、2017年）623頁。

に現れた意図の結果という側面もあったものと見られる。例えば、1993年3月10日の最初の講義をめぐる質疑応答では、「経済というものが発展すればするほど、互いに国境概念や国家概念を超える属性を持つようになる」という点や[26]、「今日の教育やマスメディアの発達や通信施設、交通手段などの発達により、文化が次第に世界的に統合されていく現象が現れている」という点を挙げながら[27]、さらに大きな統合の観点から、李用熙の説明に問題を提起する議論が続いた。李用熙は次のように答えた。

> 今言っているのは、文化の伝播による拡大傾向があるのではないか、コミュニケーション、交通、科学技術、一般情報などが地球化する傾向にあるので、エスニック・グループのような、いわば異化傾向を超えたり克服できるのではないかというような話ですよね。必ずしもそうではないので、今世界が騒がしいのです。……そして、コミュニケーションが発達した、情報社会になった、科学技術が発達したとは、具体的に一体何を意味するのでしょうか。そのようなことが発達したということとエスニシティの問題とは直接関係するものではありません。……資本主義の問題を度々忘れてしまうのに、資本主義下での商品市場の拡大、技術の発達、情報産業化、コミュニケーションの発達などが何を意味するのかということも、私たちが必ず指摘しなければならない課題です。それはまた別の課題なのです[28]。

李用熙はグローバル化の問題に対して、それがもたらす結果の複合的な側面に注目する必要性を提起したり、資本主義下で現れる色々な統合の側面を自身の講演とは分離して考察しなければならない課題として位置づけるなどの反応を見せた。冷戦後の東欧の人種対立に代表される尖鋭な問題点が提起される中で、技術の発展がアイデンティティのグローバル化をもたらすという議論は空論に近かった当時の状況を考慮すれば、李用熙の反応は理解できる側面もある。しかし、李用熙が『一般国際政治学（上）』の時から見てきた展望のタイムスパンが数百年にわたるマクロな変化だっ

26）李用熙『東洲李用熙全集　第5巻』（연암서가、2017年）45頁。
27）李用熙『東洲李用熙全集　第5巻』（연암서가、2017年）47頁。
28）李用熙『東洲李用熙全集　第5巻』（연암서가、2017年）47-48頁。

たことを考慮すれば、当時すでに始まっていたグローバルな次元の本質的変化－何よりもグローバル化 - がもたらすマクロな変容に対する展望が提示されていないことは、欠如としか評価できない。

第二に、国際政治の構造的変化が韓国ナショナリズムにどのような影響を及ぼすかについての本格的な議論も提供されなかった。 むろん、一連の講義で韓国ナショナリズム問題が全く扱われなかったわけではない。第1講の近代国家の新しい変化において、ネーションの文化共同体の側面と政治共同体の側面に関する説明の過程で[29]、国家が教育を通じて国民を標準化する例として[30]、植民地ナショナリズムの代表例として[31]、各々韓国ナショナリズムの事例が繰り返し登場し、これを通じて李用熙の韓国ナショナリズムに対する関心の持続が確認できる。しかし、これらの議論は断片的なものの集積に過ぎなかった。この講義が本来、12講座を予定していたが、李用熙の健康のため結局9講座で終えた結果、最後の結論で議論する予定だった韓国の話が不十分だったことが、この欠如をもたらした直接的な原因であった[32]。

このような二つの欠如は、李用熙が『一般国際政治学（上)』というテキストを出版したこととは別にナショナリズム論を展開したことを記憶すれば、この講演が活字化された後の発信を通じて補充する過程が期待できる。しかし、李用熙はこの期待を満たす活動を十分に展開できなかった。彼は講演から約4年後の1997年12月14日、すなわち韓国によるIMFへの救済金融要請の翌日に逝去したことで、このような進展の可能性は現実にならなかった。その結果、李用熙にとって不確実な未来だった21世紀の国際関係を前提に、孤独から脱し、地域と世界に開かれた韓国ナショナリズムの進展の展望を探る作業は、次世代の課題として残された。

29）李用熙『東洲李用熙全集　第5巻』（연암서가、2017年）15頁。
30）李用熙『東洲李用熙全集　第5巻』（연암서가、2017年）17頁。
31）李用熙『東洲李用熙全集　第5巻』（연암서가、2017年）21頁。
32）河英善『歴史 속의 젊은 그들』（乙酉文化社、2011年）283頁。

4. グローバル・ヒストリーと韓国ナショナリズムの展望

李用熙が残した韓国ナショナリズムに関する課題を解決する作業は、今日のグローバルな潮流と歩調を合わせながら展開される必要がある。3.1運動に対する李用熙の評価からも分かるように、彼は韓国ナショナリズムが世界の変化の流れとともに展開される特徴を重視した。この方法を継承するためにも、ナショナリズムをめぐる今日のグローバルな動向を理解する必要があろう。もし李用熙の展望を共有する学問的な潮流が存在するのであれば、それを参照することで、彼の作業を現在と通じるものに変換し、その結果が持つグローバルな位置を明確にすることが期待できる。グローバル・ヒストリーはまさにこの作業を可能にする特徴を備えている。セバスチャン・コンラート・（Sebastian Conrad）は『グローバル・ヒストリーとは何か（What is Global History）』でこの新しい学問分野に対する権威のある概説を提供する。本書の序論第一節のタイトルは「なぜグローバル・ヒストリーなのか？－内在主義と欧州中心主義を超えて」である[33]。コンラートはグローバル･ヒストリーの登場前の歴史学に対する批判を通じて、この新しい分野の必要性を論証した。彼は、社会科学がネットワーク化、またグローバル化された世界の現実（the realities of networked and globalized world）の理解に役立つように、正しい質問を投げかけてそれに答える作業ができなくなったと批判する。そして、この失敗の原因について近代社会科学と人文学の二つの本質的な限界によると説明した。第一は、内在主義（internalism）であるが、これによって学問が国民国家（nation-state）と連結された結果、世界とのつながりを失い、国民国家の歴史に制限されるようになってしまった。第二はヨーロッパ中心主義（Eurocentrism）であるが、学問がヨーロッパの発展をモデルとし、ヨーロッパを世界史の中心的な推進力と見なした結果、ヨーロッパの特殊な範疇を他地域の過去に付与することを通じて、近代の学問がヨーロッパ以外の地域すべてをヨーロッパの植民地としたのである。

本研究と関連して興味深い点は、内在主義とヨーロッパ中心主義の克服というグローバル・ヒストリーの特徴と、李用熙のナショナリズム論との

33） Sebastian Conrad, *What Is Global History?*, Princeton University Press, 2017, pp.3-6.

整合性である。『一般国際政治学（上）』で、彼は近代国家の特徴を通じて近代国際秩序を説明し、この行為者の変化による国際政治の変容を議論した。また、国際政治圏の議論ではヨーロッパを一つの国際政治圏として把握し、それを相対化させる論議を展開した。そして、すでに触れたとおり、李用熙はこのような国際政治に関する理解に合わせて、ナショナリズム論を展開したのである。20 世紀に将来を展望した李用熙の議論と、21 世紀の現実を見ているグローバル・ヒストリーの志向との間に少なからぬ違いがあることはもちろんであるが、半世紀の時間を越えて構造的類似性があることも明らかである。

実際、李用熙が残した韓国ナショナリズムに対する展望に、グローバル・ヒストリーと相通じる知的な格闘が見える。彼は 1966 年のシンポジウムで「現在、韓国は世界の中にあります。また、韓国の歴史は、世界の歴史の中にある歴史です」といって、世界の中で韓国ナショナリズムをみなければならないという立場を明らかにした[34]。韓国を世界の中から把握する観点は明らかであった。ところが、グローバル・ヒストリーは、それ以上を要求する。すなわち、世界を一つとして把握する観点を必要としている。同じシンポジウムで、咸錫憲は「確かに第 1 次世界大戦から今まで、世界がひとつの世界として動いていることが非常に重要なのではないか。ところで、この点についてはほとんど触れていなかったようで、その側面を少し考えてくださってはどうかと思います」と質問すると[35]、李用熙は下記のように答えた。

> 咸錫憲先生が一つの世界の問題をおっしゃいました。私はその話を聞いてぎくっとしました。……「一つの世界」とは、政治史的な - いわば国家と民族を媒介化し、同時にそれに密着していることではなく、もう一つの世界があることと存じます。言い換えれば、ある時にはこういうものをすべて超越して世界のすべての人々に直接的に一つの「イメージ」を与える、もう一つの世界があると思います。ところで、私は俗物だから敢えてそのような荘厳な世界を語る資格がありませ

34）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）234 頁。
35）李用熙他『韓国의 民族主義』（韓国日報社、1975 年）96 頁。

ん。ただ、ぎくっとしていくだけです。そこについてさらにお話しする余地はがないと存じます[36]。

彼は、咸錫憲が提起した一つの世界は自分の学問の対象外に存在するものであると説明した。つまり、咸のいう一つの世界は世俗の世界を扱う俗物ではなく、超越の世界を議論する咸のような宗教家の領域と位置付けた。ところで、ぎくりとしたということを李用熙が繰り返して言うのは、このような領域的区別では解消されていない部分もあったからではないか。おそらく、政治学でも一つになった世界を扱わなければならないが、これに対する認識が薄いという点に対する自覚がこの時期に芽生えたと思われる。例えば、この対話から約 2 年後の 1968 年 4 月の講演中に、李用熙は下記のような韓国ナショナリズムの展望を提示した。

私は浅学のただの政治学者です。しかし、今日の世界史の主流が、少なくとも民族という観点から見て、単一のナショナリズムから多民族主義へすでに移っていることを痛切に認めています。おそらくその次には新しい世界主義が歴史の主流に現れるのではないかと個人的には信じています。……ナショナリズムを克服し、そして世界史の主流として前進するためには、まずナショナリズムの上に立っていなければならないというのはいかに大きな歴史的アイロニーでしょうか。……近代化は何のためにするのでしょうか。大国への模倣でよいでしょうか。ヨーロッパ史が残した国際基準に接近しようとすることだけで終わるのでしょうか。そうでなければ、「うち」というこの逃げられない歴史的な集団を世界史の周辺から奮い立たせ、高揚した時代意識から、また自分なりの創意で将来を先取りする生活を一度やってみようということでしょうか[37]。

前述の通り、李は当時の世界史の前輪が多民族主義あるいは地域主義に向かって進んでいると考えていたが、この講演ではこれに止まらず、次の段階は世界主義が主な流れになるという信念を表明している。また、1977

36）李用熙他『韓国의 民族主義』（韓国日報社、1975 年）122-124 頁。
37）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）280-282 頁。

年の講演で「私は近代国家の性質は約 50 年後には変わる可能性があり、従って、約 50 年後はナショナリズムもその機能面において変化するだろうと思っています」とした[38]。2020 年代後半にはナショナリズムそのものを変化させるほど、近代国家の変化がかなり進展するという見通しを示した。このように李は近代国家と近代国際政治の変化に対する客観的な見方を示す一方、世界への韓国の貢献に対する主観的期待も共に提示した点は見逃されてはならない。上記の講演で、彼は韓国の近代化に対して単純な強大国の模倣に止まることを憂慮し、韓国を世界史の周辺から奮い立たせ、高揚した時代意識から、また自分なりの創意で将来を先取りする生活を送ることを提案している。そして、韓国の近代化について「世界史的な主流に貢献することで、終着するものだと私は信じます」と吐露した[39]。近代化を経た韓国のナショナリズムが世界の潮流に寄与することは、彼の究極的な希望であったことがわかる。

以上のような、韓国ナショナリズムというテーマをめぐる客観的な展望と主観的な希望が最も具体的に提示されたのが、1977 年の講演の下記のような発言だった。

> それでは私たちのナショナリズムはどうなるのでしょうか。本来マクロ的に見るなら、ご存知のように、私たちのナショナリズムは、私たちが近代国際政治体制に仕方なく編入される過程で近代国家を志向したことで受け入れた原理です。それだけでなく、韓国はナショナリズムの後輪として前輪との間に明確に距離があります。……だからといって、私たちの将来はいつも歴史の後輪だとあきらめることは断じてありません。韓国が直面している不可避な事情で、この時期はそうするしかないのではないかということだけです。未来を見る場合、いつまでもナショナリズムの原理が現実的に内包している一国主義、我が国家中心主義の土台で世界の歴史の流れが動くかは、先に申し上げた通り疑問です。また、歴史の大きな流れでも世界主義の台頭がどんどん近づいているようです。……ナショナリズムは、単なる統一に原理だけでなく、統一を通り越して、私たち民族の未来を設計する原理

38）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）416 頁。
39）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）285 頁。

です。そしてこの原理はその現実的な面で、結局は必然的に自分を超越しなければなりません。私たちにとってナショナリズムは、単に自分の貫徹に満足するのではなく、歴史の後輪にとどまらないためには、脱ナショナリズムの時代を見据えて、自己を克服するナショナリズムでなければならないと私は思います[40]。

李用熙はまず、過去については、近代国際政治体制とナショナリズムの関連性を前提に韓国がこの原理を受け入れたという点を確認して、当代のナショナリズムをめぐる世界の流れのなかでは、韓国が後輪にあることを指摘してから、将来の世界主義に対する展望を提示した。彼はこのように、客観的な変化の中で韓国ナショナリズムが置かれている厳しい現実を受け入れながらも、あきらめず前進する必要性を強調した。1968 年の講演の姿勢がナショナリズムをめぐる議論で持続されていると理解できるだろう。李用熙のナショナリズム研究の批判的継承という観点からして、この講演で注目すべきことは、彼が提示したナショナリズムという課題の解決策はナショナリズムの容易な放棄ではなかったという点である。彼は脱ナショナリズムの時代を見据えて、ナショナリズムが自分を「超越」して「克服」しなければならないという課題を提示した。李用熙が長い間観察してきたヨーロッパの事例で、民族は地域主義の浮上によって以前と同様の独占的地位こそ失ったものの、多層的に存在する人間集団の中で依然として最も重要な共同体の一つとして君臨しているという事実を考慮すれば、彼のナショナリズムの展望に現れた単純ではない解決策の提示は理解できる。韓国ナショナリズムは脱民族時代に自分自身を克服する過程を通じて脱ナショナリズムの時代に合う形で克服される過程を必要とし、この過程はおそらく世界主義の時代にも同様に要求されるはずだった。

以上のように李用熙は、まだ明確に見られなかったグローバル化を展望しながら、それに合わせた韓国ナショナリズムの変化の展望を残した。その過程で、世界の変化の展望では、国民国家の中心性を否定した点でグローバル・ヒストリーの内在主義への批判と、また、西洋中心の近現代において周辺であった韓国のような国家の貢献を訴えた点では、ヨーロッパ中心

40）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）419-423 頁。

主義の批判と共鳴していることが理解できよう。グローバルな世界の中で、韓国には自国の経験を反映したナショナリズムの克服が要請されているが、それはグローバル・ヒストリーのさらなる展開の一つの意義ある部分として位置づけられると期待できる。

ところが、韓国ナショナリズムを今日克服するための知的な挑戦の際には、研究者による創造的な作業が必要な部分も多い。その出発点は、李用熙には将来であった今日の世界と韓国に対する理解であろう。上述のとおり、彼は近代国家の変容の結果の中で、主として地域主義に最後まで注目したが、グローバルな次元の変化についての展望への関心は比較的弱かった。李用熙が提示した国際政治の理解の枠組みを利用しながらも、彼の歴史的な限界については批判したうえで、韓国ナショナリズムを取り巻く新たな世界政治の現実について正確な理解を提示する必要があろう。次に韓国に対する理解にも大きな空白がある。李用熙は彼が追求した前進的ナショナリズムの国内の部分について、指導勢力や農村問題などのナショナリズムが直面していた課題について議論すると同時に[41]、ナショナリズムの展望をめぐって、民主主義と近代化の必要性を強調していた[42]。ただ、1960-70 年代には先進国と途上国の格差が大きくなる現象を繰り返して指摘したことから分かるように、李用熙は韓国の将来の見通しについて楽観的ではなかった[43]。このような悲観が彼の統一問題への執着につながったことは、先述の通りである。その結果、李用熙は 2020 年代後半の近代国家の変化は展望したが、その時代における韓国の条件について有意味な議論をほとんど残していない。もっとも、現在を生きている学者が過去の李の予測に頼る必要もなかろう。民主化や経済発展などを含めた韓国ナショナリズムをめぐる内部の現実を正確に理解することで、韓国ナショナリズムの展望に対する議論の安定的な基礎を築くことができよう。

以上の二つの作業によって、李用熙のナショナリズム論と今日のグローバル・ヒストリーの潮流が合体され、韓国ナショナリズムの克服をめぐる研究が本格的に展開できる条件が整うと思われる。このような基礎の上、韓国ナショナリズムの克服の展望を学問的に追求することができる。本稿

41）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）257-262、263-264 頁等。
42）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）283-284、437-439 頁等。
43）李用熙『東洲李用熙全集　第 2 巻』（연암서가、2017 年）438-439 頁。

では、展開されるはずの研究の方向性を提示することにとどまる。第一に、近代国際政治体制の克服の観点から、言説としての韓国ナショナリズムの昇華を期待できるだろう。近代国際政治体制ではなく世界政治体制を構想し実現する過程で、ナショナリズムはその排他的地位をはく奪され、多様な層位に存在する非国家の行為者とも関係を結ぶことになる。もし韓国が前近代の儒教的な国際関係や近代の植民地の経験が持つ普遍的な部分を生かしながら、近代国際政治秩序と区別される世界関係の理論的展望の形成に貢献するなら、韓国ナショナリズムが持つ普遍の部分はグローバルな普遍性の一部へ組み込まれるであろう。この過程で近代の産物である韓国ナショナリズムは自然に解体されることが期待できる。第二に、韓国ナショナリズムの現実的超越を目指す研究によって、ヨーロッパ中心主義の克服のモデルを提示することが期待される。李用熙は植民地としての韓国の歴史に注目しならも、それを世界の変動とつなげて理解しようとした。この態度を継承すると、脱植民地の観点から韓国ナショナリズムの原体験を帝国主義をめぐるグローバルな歴史変動とつなげて見ることができる。その結果、韓国ナショナリズムの克服過程において外部の中心になる日本との和解について、そのグローバル・ヒストリー的意義を認識する可能性が出てくる。20 世紀後半で日韓が成し遂げた歴史問題を巡る成果が持つグローバルな意義を認識できれば、それをグローバルな和解のモデルとして提示することも不可能ではなかろう。その成果は、歴史問題の解決に向けたさらなる推進力を両国に提供すると同時に、韓国ナショナリズムの特徴である抵抗が持つ排他性を克服し、抵抗の原理を抑圧の経験の教訓を生かしたグローバルな正義の一つの根拠として昇華される可能性へつながるであろう。

5. おわりに

本稿は 21 世紀の地球的レベルの変化を俯瞰しながら韓国ナショナリズムの意味ある克服を考える試みであった。グローバル・ヒストリーを参照しながら 20 世紀のナショナリズム論を批判的に継承することを通じて、この課題に挑むことを提案した。韓国ナショナリズムは、東アジアにおける帝国主義の拡散に対する対抗のために近代国際政治体制の原理を受入れる過程で生まれたという意味で歴史的な産物である。そして、近代国際政

治体制の揺らぎとともに、いつか消えることは歴史的な運命であろう。韓国ナショナリズムの形成の際に韓国人は帝国主義の力の下で、受動的な反応を強いられたが、今日の克服の過程では能動的な働きの可能性が与えられている。李用熙のナショナリズム研究をグローバル・ヒストリーを用いながら批判的に継承する作業は、韓国ナショナリズムをグローバルな普遍の原理の一部として、また、グローバルな和解の原理として昇華することで、克服する道を開いてくれるであろう。